

先週の礼拝メッセージ(2024年1月21日) ベン牧師

「嘆きを踊りに」 詩篇 30:1-13

30篇の表題は「賛歌。神殿奉献の歌。ダビデの詩」とあります。しかし不思議に思うことが二つあります。一つはダビデの時代は、まだ神殿建設は実現していませんでした、息子ソロモンの時に神殿は建てられるのです。それなのになぜ、彼は神殿奉献の歌を歌ったのでしょうか。諸説ありますが、ダビデは本来、自分が王の時に神殿を建てようとしていました。しかし神様に止められたのです。ですから、ダビデがやがての神殿建設を思い、あらかじめ歌ったのではないかということです。次に不思議なのは、神殿奉献の歌であるにもかかわらず、ただの一度も建物について言及されていないことです。ダビデは自分の経験と神の恵みを歌っています。

「主よ、あなたを崇めます。あなたは私をすくい上げ、私のことで敵を喜ばせることはありませんでした。」(2)

ダビデははじめに神を賛美することから始めます。そしてこの賛美が30篇全体を貫いているのです。つまり、神殿とは神を礼拝する場所です、そして、神によって救われた者しか本当の礼拝は献げられません。彼は神との個人的な繋がりの中で、神殿奉献の歌を、神がこんな者をも愛し、赦し、救ってくださったところを感謝することから始めるのです。

「安らかなときには、言いました。『私はとこしえに揺らぐことなどない』と。主よ、あなたは御旨によって、私を強固な山にしてくださいました。」(7、8前半)

人は誰でも、物事がうまく行って安泰な時は、自分の未来も揺らがないと思います。決して動かない強固な山のように安定が続くと思います。ダビデも、神の恵みによってそのような日々を過ごした時もありました。

「しかし、御顔を隠されると、私はおじけました。」(8後半)

御顔を隠されたとありますが、神様が隠れたわけではなく、ダビデは自分の不信仰と罪ゆえに、神の顔を見れなくなってしまったのです。彼は、おじけたと告白しています。そして神の助けを切に祈り求めるのです。

「主よ、私はあなたに呼びかけます。わが主に憐れみを乞い願います。...お聞きください。主よ、私を憐れんでください。主よ、私の助けとなってください」(9-11)

しかしそのすぐ後で彼は、神をほめたたえます。

「あなたは私の嘆きを踊りに変え、私の粗布を解き、喜びを帯とされました。」(12)

ダビデは、神は嘆きを喜びの踊りに変えてくださる神であることを歌っています。

同じような表現が6節にあります。「主の怒りは一時。しかし、生涯は御旨の内にある。タベは涙のうちに過ごしても朝には喜びの歌がある。」

ダビデはどんなところを通ろうとも、神様が必ず助け出してくださるという経験をしました。神を信じる者の一生は、神の御手の中にあることを十分承知していました。

ダビデだけではなく、私たちも、その人生は決して順風満帆ではありません。かえって聖書は試練を約束しています。なぜなら、神様は私たちを愛しておられ、私たちを子供として扱ってくださるので、私たちを訓練されるからです。しかし必ず、嘆きは喜びの踊りに変えられます。私たちが神を礼拝できるのは救われた喜びがあるからです。そして、それだけではなく、神様は、私たちが日常生活の中で遭遇する様々な問題を解決し、救い出してくくださるからです。

「それは、心の底からあなたをほめ歌い、口をつぐむことのないためです。わが神、主よ。とこしえに、あなたに感謝します。」(13)

この喜びをダビデはどうして黙っていられようかと、心からの感謝を歌うのです。神殿奉献の歌に記されているのは、神の恵みの中に生かされているという信仰です。そして、これこそが礼拝であり、まさに礼拝の建物として献げられる神殿の中心となるべきことなのです。

同じように教会は、共に集まり、神の恵みを分かち合い、心を一つにして主を礼拝してこそこの教会なのです。

タベの涙を朝には喜びの歌とし、嘆きを踊りに変え、粗布を喜びの帯としてくださる主につながる私たちです。神の変わらない約束に立って、共に主を見上げて前進してゆきましょう。

